

『みんなの図書館』2018年12月号（図書館問題研究会 2018年11月10日発行）

山口支部学習会報告

「図書館を学ぶ会」（西河内靖泰氏講演会）の略報

図書館友の会山口県連絡会 藤村 聡

周南市で第6回目の「図書館を学ぶ会」を、5番目の「ツタヤ図書館」となる徳山駅前図書館が開館して丁度7か月目の9月3日(月)午後2時～3時30分に、周南市学び・交流プラザ(新南陽図書館等の複合施設)で開催した。新南陽図書館友の会主催、図書館友の会山口県連絡会・図問研山口支部共催。講師は下関市立中央図書館長(前広島女学院大学特任准教授)の西河内靖泰氏。演題は「公共図書館の基本って何?」。参加者は山口県内各地からと佐賀、福岡、大分各県からの25人。既に開館してしまったためか以前の学習会に比して市民の参加がやや少なく、翌日が9月議会開会で市議会議員の参加も共産党1人以外に無かったのはいささか残念!

西河内さんは、世間で話題になる図書館のマスコミ報道などをみると違和感を覚えるが、図書館の社会的意義は何なのか?図書館の本質を理解し在るべき姿を見据えて欲しいと始められ、先ず参考資料からみて、図書館の基本的位置付けは教育・文化機関。図書館は何のため、誰のためにあるのか?図書館は知る自由を保障する人権保障機関であるとされ、図書館の果たすべき役割を図書館法第3条から解説。ツタヤ図書館はこの条項も逸脱していると指摘された。

また、図書館はこの基本が必ずしも出来てないことにも言及され、自身の取組まれた実践経験も紹介された。さらに、図書館の存在は当然の権利であり、図書館を支える住民の意識が根付くことが大切。図書館は地域に根差した情報の収集提供や課題対応に取組み、本と人が出会う場、資料・情報の提供機関である。公共図書館に集客効果や賑わいを第一義に求めるのは明らかに図書館の基本とはズレている、人間社会の知的基盤である図書館の存在を軽視して欲しくないと論難された。

長年の実践経験と研究活動にもとづき、公共図書館の基本について熱く語られた講演は、今後の徳山駅前図書館の推移を注視していくうえで大いに参考になるとともに、参加者のこれからの活動にも役立つ、詳細なレジュメと大量の参考資料付きの文字どおり有意義な図書館を学ぶ会となった。

当日午前11時～12時に「徳山駅前図書館見学会」も図書館友の会山口県連絡会の主催で実施した。参加は同会メンバー5人、図書館を学ぶ会講師と武雄市・福岡市からの3人で計8人。館内を3階まで順次自由に見物したが、図書館としてはもちろん書店としても資料・サービス共に充実しておらず、自由に閲覧できることもあってカウンターでの貸出も販売も殆ど見かけないことなどが指摘された。同図書館の詳細は本誌9月号の拙稿「周南市立徳山駅前図書館にみる「ツタヤ図書館」の特徴と影響」を参照していただきたい。

感想「図書館を学ぶ会」 & 「徳山駅前図書館見学会」

図書館友の会全国連絡会 瓜生泰子

J R徳山駅の新幹線上りホームの窓から「周南市立駅前図書館」と掲げた駅ビルが見えます。今回の目的地の一つであるこのビルは、「周南市立徳山駅前図書館」を含む「徳山駅前賑わい交流施設」なのですが、堂々とかかげられている看板は正式名称ではない上に‘徳山’の文字が入っていません。この駅ビルを巡る議論で徹頭徹尾変わらなかったのは「徳山駅周辺まちづくり」だったはず。それに2014年開催の「第3回徳山駅周辺まちづくりシンポジウム」では、指定管理者であるCCCの高橋氏が「自分達はまちづくりを企画することになった」と言い、駅ビルで集客した人々が商店街で回遊することを期待した事業だったはず。にもかかわらず、その‘まち’の名称‘徳山’を入れないとはどういうつもりでしょうか？それを是とした周南市も何を考えているのでしょうか？

愛称ですらない適当な名を顔である駅ビルそのものに何箇所もデカデカと掲げる軽さはどうにも理解できません。名称は自己を表すものです。名称をぞんざいに扱うのは、自己に重きを置いていないからでしょう。そう考えると、CCCの言う‘図書館’のあり方にも合点がゆきます。通称ツタヤ図書館には‘図書館’という名称が持つ実態がきちんと備わっていないからです。彼らは‘図書館’という名称を軽い気持ちでぞんざいに扱っている、と私は感じています。

この図書館に第一に期待されているのは集客による賑わいですが、それは図書館の基本と大きくズレていると私は確信しています。その確信を、この日の講演会「公共図書館の基本って何？」講師の西河内靖泰さんがかみ砕いた言葉でわかりやすく、時に熱く語っていただきました。特に、図書館法第三条に照らし合わせるとツタヤ図書館は三条違反であるし‘まちの賑わい’についても書いてないと言われ、図書館を使ってまちに賑わいをという考え方にNoを唱えていらっしやったことに溜飲が下がる思いがしました。

では実際のところ徳山駅前図書館がどのような場かと言えば、図書館としては使いにくいけれど‘売店つき駅の待合室’と思えばいかにもTSUTAYAという空間は長時間滞在に向いていると思えました。とはいえ、オープンから約半年で来館者が100万人を超えたというわりには目的の‘まちのにぎわい’にはまだまだ繋がっていませんし、‘徳山’らしきも見えません。そもそも‘まちづくり’は一体どこにあるのでしょうか？

使いにくい図書館に‘にぎわい’‘まちづくり’という目的も未達成。そこに巨額の税金がつけ込まれていることを市民はどう思っているのでしょうか？その答えの一つを講演会の質疑応答中に聞くことができました。地元市民と思われる方が驚きと怒りが入り混じった声で発言されたのです、「私はTSUTAYAが駅ビルを、お金を払って借りてやっているのかと思っていた！」と。それほどまでに、駅ビルはTSUTAYAらしさに溢れた場がありました。

注：CCC=カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社